

中国語初学者による台湾への1年留学について —輔仁大学外国語文学院日本語文学系における学びのプロセス—

伊藤 明美

I. はじめに

藤女子大学が2003年12月に台湾の輔仁大学と姉妹校協定を結んでから、早や15年となった。2005年からは毎年のように2～5名の学生を受け入れており、2006年以降は本学からも毎年1～5名の学生を派遣してきた¹。これまでに輔仁大学から受入れた学生の総数は36人、本学からの派遣学生も24人である。また、これまでは双方ともに大多数の学生の留学期間は1年間（2セメスター）、実質およそ10ヵ月であった。

輔仁大学との交換留学におけるもっとも大きな特徴は、本学からの学生を受け入れているのが日本語や日本文学を専門とする「日本語文学系²」であることだろう。学科の性質上、開講される講義の多くで日本語が利用され、また、教授陣にも日本語の母語話者が少なくない。中国語初学者である本学学生たちの留学前の語学能力が極めて限定的であることを考えれば、こうした環境なくして学部留学は難しいが、その一方で、IELTS や TOEFL のような語学試験のスコアが入学条件となる英語圏への長期留学者との比較においては、学びのプロセスおよび留学成果とされるものの内容や質が異なる可能性もある。

そこで本論では、藤女子大学における輔仁大学への派遣プログラムの質

-
- 1 協定締結直後の2004年には短期日本語集中コース（1か月）に4名の留学生を受入れていることに加え、日本語教員養成課程に在籍する学生の教育実習では、これまで158名を派遣している。2017年には夏季休暇を利用した輔仁大学の短期語学プログラムへの派遣も開始された。
 - 2 日本語文学系は学科名称である。学科が設置されている学部は外国語文学院。また、輔仁大学の正式名称は天主教輔仁大学であるが、現地でも通称として輔仁大学とされることが多い。

の向上を図ることを主たる目的として、初修外国語科目として位置づけられる中国語を1年～2年程度学習しただけで留学をする学生の経験を明らかにする。高いレベルで母語利用が可能となる輔仁大学での学部留学が、学生たちの語学能力や異文化コミュニケーションをめぐる態度を変化させているとすれば、それは具体的にどのような内容で、どのようなプロセスを経るものであるのかを探索的に分析してみたい。

II. 台湾への留学

1. 台湾留学の現状

日本人大学生の留学先はアメリカをはじめとする英語圏が多いものの、韓国や中国などアジア諸国・地域への留学も年々増加し、派遣先トップ10に入る国々も増えている(日本学生支援機構、2017)。2012年～2016年のデータでは、台湾やタイへの留学者数は一貫して増加し、本論が対象とする台湾への派遣者数は5年の間に1,265人から2,996人となり、2倍以上増加している(図1参照)。

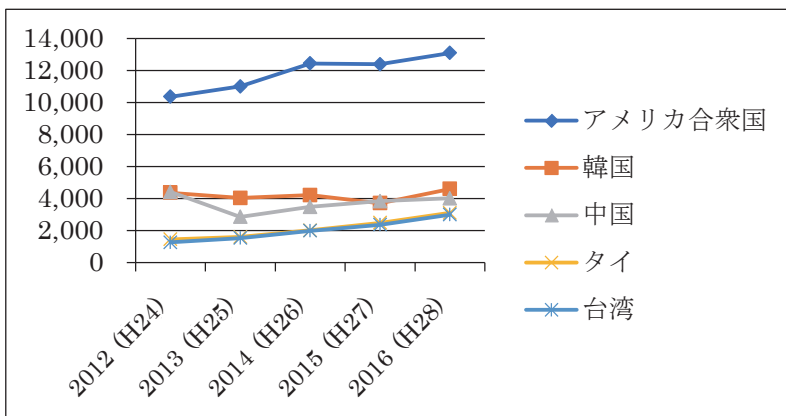


図1 アジアへの留學生数の推移

日本学生支援機構「協定等に基づく日本人学生留學生状況調査結果」より筆者作成

こうした現象の背景要因の一つに、アジア諸国・地域の国際戦略がある。教育文化交流の拠点として自らを位置づけ、国際社会におけるプレゼンスを確保したいという思惑は、東アジア諸国における留学生受け入れ政策の拡大につながった。2005年には台湾でも（財）高等教育国際合作基金会在政府教育部傘下の大学連合組織として設立され、留学生獲得に向けた活動を活発に展開しはじめた（杉村，2008）。

こうした活動の成果として、現在、台湾には多くの日本人留学生が滞在する。台湾政府（教育部）によると、2016年に台湾に留学した日本人の総数は7,548人で、中国大陸、マレーシア、香港に次いで4番目に多かった。また、所属先の内訳をみると、学部および大学院に学んだ者が1,108人、大学附属の語学センターで中国語を学んだ者が4,387人（全体の58%）で、留学目的の中心となっているのは語学研修であることがわかる。

一方、前述したように日本人大学生の留学先はアメリカなどの英語圏が多く、留学成果に関わる研究の多くは英語力向上に関連づけた英語圏への留学に集中している。台湾をはじめとする東アジア諸国が対象とされることは少なく、なかでも3か月以上の中・長期留学の成果を議論したものはごくわずかである。本節では、アジアへの留学意義を論じた大西（2005）を中心に、台湾および韓国への留学が大学生に与えるインパクトや成果を検討する。

大西（2005）は、台湾を含むアジア留学経験者20人に対して、6つの質問から成る聞き取り調査を行った³。台湾留学経験者の語りを概観すると、その多くが台湾人の優しい気質、日本人に対する好感情、文化的価値観の共有、友だち作りの容易さなどに言及しており、総じて台湾への留学経験に肯定的な評価を与えていた。なかには、自分自身は政治学科に所属しながらも、日本語学科所属の台湾人から長期にわたるサポートを受け、帰国

3 ①国や大学を選んだ理由、②留学生活について、③留学して良かったこと、悪かったこと、④日本や欧米の大学との比較、⑤仕事への有用性、⑥アジア留学を目指す若者へのメッセージ

後10年経っても交友関係があると語る留学経験者もいた。また、大学における台湾人の真面目な勉強ぶりや将来に対する姿勢に影響を受けたとする人も多く、さらには、台湾での留学生在活が卒業後の仕事に役立っているとしたコメントも多かった。

一方、企業は欧米留学経験者には向上心、コミュニケーション能力、交渉力などを期待するのに、アジア留学経験者には語学能力を含め現地固有の事象を理解する力を求めている（大西、2005）。戦後、日本の外交政策や人々の関心はアメリカを中心とした欧米一辺倒であり、企業には非英語圏の社会・文化的知識が相対的に充分とはいえない。進出するアジア地域の事情をよく知る人物を企業が必要とするのは、自然なことであろう。

特に中国は今、経済・政治・軍事的に国際的なプレゼンスを増している。中国語を話し、また同時に、中国事情に精通する人材を確保することは、中国でビジネスを展開する企業にとって極めて重要である。実際、大西（2005）が企業に対して行ったアンケート調査においても、中国留学経験者を中心にアジア諸国への留学経験者の「採用を検討中」とする企業は多かった。この調査からすでに10年以上が経過した今では、日本における中国や台湾からの投資や観光客がますます増加し、こうした国や地域での留学経験者の人材的価値は一層高まっているといえるだろう。

くわえて高橋・服部・武知・酒匂（2018）は、近畿大学国際学部の学生による韓国への8か月から1年間の留学を通じた学びについて論じている。韓国語の初学者である派遣学生が、現地での1000時間におよぶ語学訓練を経て得るものは、韓国語だけでなく英語学習も必要という「複言語話者の視点」と、多様な人々との接触によって気づかされる自らの「日本人性」であった⁴。

海外留学が自分自身の所属する社会や文化への気づきにつながるということは、これまで多くの研究者が指摘してきたことであり、もはや自明の

4 分析対象となったのは、留学中に提出されたという6回の留学レポートである。

真理ともいえる。人は異文化と接触によってのみ、自文化を「発見」できるのである。非英語圏である韓国への留学成果として注目すべきは、むしろ前者であろう。留学生は、民族的、言語的、文化的多様性のなかで韓国語を学び、時に英語を交えながら、より広く世界の人々と関係を築き上げることの楽しさやその意義を体感し、世界共通語として機能する英語の汎用性を深く認識するにいたる。一方こうした英語に対する気づきは、英語圏への留学生と比較した場合、ひっ迫感を伴うよりデリケートなものである可能性が高い。大衆化された日本の大学における学生のアジア言語学習は、その動機の一部に強い英語への苦手意識が存在することを否定できないからである。

2. 藤女子大学の台湾派遣をめぐる諸課題

輔仁大学との交換留学が開始されて以来、本学からの派遣がとぎれなく続いているのは、留学に必要な費用が安く済むだけでなく⁵、高い中国語の学習人気が関連していることだろう。中国語科目は1994年に開講され、それ以来英語を除く外国語科目（中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語）のなかで、最も高い人気を維持している。2018年度も外国語履修者全体のおよそ25%を占めた⁶。この傾向は、長年にわたって変化がない。

近年では、北海道でも中国や台湾からの観光客が増加し（図2参照）、中国語を話す人々との直接・間接の接触は、道民にとっておよそ日常的な風景となった。観光地や空港はもとより、ドラッグストア、スーパー、居酒屋などで頻繁に中国語を聞いて育つ若者の一定数が、中国語学習に興味を持つのはごく自然なことであり、また、中国語の学習を卒業後のキャリア

5 輔仁大学とは学生の「交換」が前提となっており、学費は相殺される。そのため学生の経済的負担は、往復の交通費、現地での住居費（寮費）と食費、お小遣い等で済む。

6 2018年度の外国語履修登録は、英語 46.06%、中国語 25.04%、韓国語 16.28%、フランス語 7.07%、ドイツ語 5.53%であった。

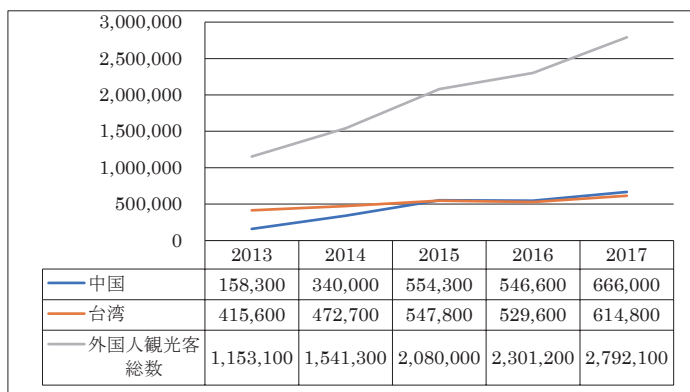


図2 北海道における外国人観光客の推移

北海道「訪日外国人来道者（実人数）の推移」

より筆者作成

アにつなげて考える動機にもなっている。

一方、多くの日本人学生にとって中国語は大学入学後に初めて学ぶ外国語であり、しかもそれは声調言語である。声 (tone) のパターンに基づいて意味の区別をすることがない日本語話者にとって、中国語の修得はそれほど容易ではない。さらに、本学の中国語科目は、いわゆる「外国語」枠の中に設置され、学部への派遣留学を想定したカリキュラムにもなっていない。そこで入学当初から留学を希望する学生でも、大学では派遣直前となる2年次あるいは3年次の前期終了時までには、6～12単位程度を取得するに過ぎないといった現状がある。

実質的な学習時間は、1単位22.5時間（1コマ90分を15回として算出）として、6単位では135時間、12単位でも270時間程度にしかならない。中国語と日本語の言語距離は英語ほど離れていないが、学習時間としてはあまりにも少ない。学生によっては中学・高校時代から自主的に中国語を学んでくる者もいるが、それはむしろ稀なケースである。しかも、言語距離の近い韓国語と違って、中国語は中高生が独学で上級レベルまでに達することは難しい。これまで派遣した学生はすべて、輔仁大学が提供する外国

人のための中国語コース（夜間）に入り、帰国までの間、継続的に語学訓練を受けながら学部授業を履修した。

輔仁大学における受入れ学科が日本語文学系であることは、以下の2つの点において本学からの派遣学生にとって有利である。1つめは、学部入学レベルに達していない中国語力の不足が大学生活の足かせになりにくい、ということである。日本語文学系に設置された科目には、各種の翻訳授業にくわえて、日本語で行われる文学、思想、歴史などの講義がある。実際、これまで多くの派遣学生は、前期に日本人教師による「日本近代思想」「日本古代史」「日本名著選讀（日本文学の授業）」などを履修し、そこでTAのような役割を担いつつ、中国語や日本語を使いながら現地の学生たちと交流を深めていた。学生たちは夜間に行われる語学訓練とこうした学部授業を通して徐々に中国語力を発達させ、後期には少ないながらも中国語だけで行われる授業を履修する学生があらわれることになる。

派遣学生の受け入れ先が日本語文学系であることのもう一つの利点は、異国での文化適応を支える現地の友人が作りやすいということであろう。日本語文学系には、当然ながら日本語を話す多くの親日的な台湾人がいる。極論すれば、派遣学生はなにもせず友人ネットワークを拡大することができる環境におかれるのである。留学生の支援係として活躍するバディ（buddy）と呼ばれる現地学生を中心に、派遣学生のまわりには、困ったことがあればすぐに手を差し伸べてくれる人が多い。

台湾人の親日ぶりはよく知られている。たとえば王（2012）は、台湾では日本のドラマやアニメ、お笑い番組が連日のようにテレビで放映され、街の人々の会話の端々に「Riben（日本）」が出てくるといい、「通通飛（痛い痛い飛んでけ〜）」などの表現が若者の間で流行したり、「哈日族」と呼ばれる熱狂的な親日の若者層が存在すると述べた。台湾人のこうした親日ぶりは、2011年3月に起きた東日本大震災への総額250億円を超える義援金や、最近では、北海道地震が起きた2018年9月6日当日、即座に40人の特殊救助隊員と災害救助犬2頭を派遣する用意があると発表した台湾

政府（台湾外交部）の姿勢にもあらわれている。

また、2018年現在、台湾では日本語、日本文学、日本文化等に関連づけた学科を設置する高等教育機関が43校あり、高等教育機関での学習者は約12万人、初等・中等教育と学校以外で日本語を学ぶ人を合わせるとおよそ25万人（台湾の人口比でおよそ93.4人に1人）になり、学習者人口のみでも韓国、オーストラリアに次ぐ世界第3位である（呉, 2011）。こうしたなか、台湾では日本人との交流に積極的な人々が多いだろうことは想像に難くない。中国語初学者である本学の派遣留学生在がこれまで、重大な適応問題を抱えることなく留学生生活を終える背景には、台湾全土にゆきわたる人びとの日本（人）に対する肯定的態度があるといえる。

一方、英語圏留学の場合は、現地で英語のnative speakerと親しくなるのは難しいことがわかっている。多くの学生は語学力や適応などをめぐって共通の課題を抱えるnon-native speakerの留學生や日本人同士で過ごしている（工藤, 2003b；朱, 2016など）。また、Gareis (2012) は、アメリカに滞在する東アジアからの留學生には、親しいアメリカ人の友人がいなかったことを明らかにした。文化的に異なる友人作りの方法、英語力、授業で出される大量の課題による時間的余裕のなさが友人作りを困難にしていることは明らかだが、それらにくわえて、留學生のまわりには日本をはじめ東アジアの社会や文化に関心のあるnative speakerが少ないといった事情もあることだろう。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究参加者と面接方法

2017年9月からの2セメスターを輔仁大学で過ごした5人の派遣学生（2018年度現在3年生4人、4年生1人）のうち、インタビュー調査に協力してくれた4人を対象に半構造化面接を行った。インタビューでは、留学動機、直面した困難、語学能力の変化、心理的・認知的変化など、台湾での留学経験を総合的に振り返ってもらった。参加者には調査者の質問に

縛られることなく、自由に台湾留学の経験を話してもらった。

面接はすべて2018年8月中に筆者の研究室で実施し、同意を得た上でICレコーダーに記録した。インタビューの時間は、1人およそ60分であった。事前に研究目的や方法を参加学生に告げるとともに、得られたデータや情報は学術資料以外の目的で使用しないこと、面接で経験を語ることによって生じる不利益は一切ないことを説明し、調査協力の同意を得た。

2. データ分析の手順

グラウンデッド・セオリーをベースとして開発された「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」(以下、M-GTA)を用いた。この方法は、研究者によって意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された狭い範囲内に関する人間行動の変化と多様性を説明できる。また、そもそもグラウンデッド・セオリーは、教育や医療などといったヒューマンサービス領域の実践的活用のための理論であり、データが収集された現場と同じような社会的な場に戻されて、試されることによってその出来栄が評価されるべきという立場をとる(木下, 1999; 2007)。M-GTAを用いたのは、派遣学生それぞれの留学経験の共通性や相違性を時間の流れのなかで見出すとともに、それらに基づいて検討される留学成果や課題が、留学生の言語・認知・心理的発達への考察的提言や援助の可視化、ひいては輔仁大学への留学生派遣事業というヒューマンサービスの質の向上につながると考えたからである。

インタビュー内容はすべて逐語化し、電子データ化した。次に、得られたデータ全体に目を通し、その後、最も内容が豊富だと認められた事例を取り上げ、数行ずつ関連のある部分に着目して、意味を表現する概念名をつけた。生成された概念は、時間の経過を意識しつつ、内容の類似性・相違性に基づいてカテゴリー化し、その上でカテゴリー間の関係について検討した。

以下、本論文における概念生成過程を例示する。「中学の時に見ていた台湾ドラマで中国語いいなって。・・・留学は、漠然と、そのころからし

てみたいと思ってました」は、最も内容が豊富だった1例目の学生によって語られた。この語りから筆者は、留学動機は台湾メディアという概念を生成し、その定義として「幼い頃に接触した台湾や中国のテレビドラマや動画、音楽、アイドルなどが台湾(中国)への留学をめざすきっかけになる」とした。

また、M-GTA では、概念ごとに思い浮かぶアイデアや疑問を理論的メモとして書き残すことが、分析を進める上で重要だとされる。上記概念では「韓国のメディアに関心を持つ学生が多い昨今、接触したメディアは、台湾のものだけか」、「もし、韓国や英語圏など、他の国のメディアにもアクセスしていた場合、最終的に中国語履修を通じて台湾留学を選ぶ理由やきっかけは何か」、「中国語への関心は、台湾ではなく中国への関心ともつながるのか」などを理論メモとして残した。また、その後に行う2例目の分析では、その対象として、1例目と最も対照的な事例を取り上げ、対極・類似比較の観点から分析を進めた。なお、本論では、データの意味付けを深めるために結果と考察をまとめて記述する。

IV. 結果と考察

全体を分析した結果、輔仁大学日本語文学系への1年留学による変化のプロセスには、《不安併存型自己変化のプロセス》をコアカテゴリーとして、6つのカテゴリーとそれらを構成する19の概念、さらに経験の質を左右する2つの概念が見いだされた。カテゴリー間の関係を図3に示し、以下にその概要を説明する。図ならびに文章中に利用した記号については、カテゴリーを《》、概念は下線、語りの例示は「」で示す。発言例示のなかの（）は、内容をより明らかにするための補足説明である。

まず、台湾への留学契機として中学・高校時代の《東アジア諸国・地域への漠然とした留学意欲の芽生え》をカテゴリー化した。留学生は、特に母親をはじめとするアジア好きの家族や友人、日々遭遇する中国・台湾からの観光客など、後の台湾留学を刺激するような環境に育っていた。また、

学生たちは入学前に台湾やシンガポールへの旅行なども経験しており、早ければ中学生の頃から、漠然と東アジア諸国・地域に留学してみたいといった気持ちを抱きはじめていた。東アジア地域への関心は徐々に高まり、学生たちは台湾や中国、あるいは韓国などで制作されるドラマ、アイドル、歌などを繰り返し視聴している。なかには熱心に中国語や韓国語の学習に取り組み、大学入学前に HSK 4 級⁷を取得した者もいた。

大学入学後には、いずれの学生も卒業に必要な外国語科目の単位として中国語を履修し、同時に留学を強く意識するが、語学能力、就職活動、初めてとなる長期海外生活などに不安を感じて逡巡していた。しかし、中国語を担当する教員や国際交流センター、また、台湾留学を経験した大学の先輩など、留学を後押しする学内環境もあり、‘何とかなるかもしれない’という脆弱な期待感と覚悟で留学を決意しており、これを《不安のなかで覚悟する》とカテゴリー化した。

渡航後の台湾では、初期の2週間程度を《不安とストレス》のなかで過ごす、日本語の話せる現地学生のサポートを得たり、日本人同士で協力しあいながら、早い段階で台湾生活や文化に適応していくようであり、これを《半台半日⁸生活による適応》とカテゴリー化した。輔仁大学では、パディと呼ばれる日本語の話せる現地学生を留学生のサポート役として活用しているほか、日本語学科で知り合う他の学生たちからの個人的支援も期待でき、学生たちはむしろ支援的な雰囲気のなかで留学生生活をスタートさせる。その後は、《台日比較・評価を経た自己変化のプロセス》を歩みながら、帰国後や卒業後の生活について考えるようになっていた。一方、最終的に留学生は明らかに異なる感情・考え方によって2つのグループに

7 HSKは中国政府公認の中国語検定で、最高レベルは6級。4級は中国語を用いて広範囲の話題について会話ができ、中国語を母国語とする相手と比較的流暢にコミュニケーションをとることができるレベル（HSK 公式サイトより。検索日は2018.10.30）。

8 ここでは、台湾での留学経験を描写するという意味で「半台半日」という表現を使った。

分かれていくことになる。これを《異なる未来像》とカテゴリー化したのが、その背景には留学前から続く語学力（勉強量）の差が大きく影響していた。

1. 東アジア諸国・地域への漠然とした留学意欲の芽生え

台湾（あるいは中国や韓国）などに、「留学したい」という思いは中学・高校時代にさかのぼることが多かった。そのきっかけはポップカルチャー・旅行である。高橋・服部・武知・酒匂（2018）は、韓国留学の主たる動機としてK-POPやファッション・食文化への関心をあげたが、アジアへの留学は学生のこうした内発的動機がそのスタート地点にあることがうかがえる。

この時期には、中国語や韓国語を独学で学びはじめる者もいる。ある学生は台湾でリメイクされた日本のドラマ「花より団子がきっかけ」で、「なんとなく、高一からNHKラジオで中国語を勉強しました」と語り、別の学生も「中国語と韓国語にちょっと興味が湧いて・・・中学で、（漫画を使いながら）韓国語は勉強してて、ハングルは読めるようになって」と語る。これを内発的動機がうながす‘なんとなく’学習と概念化した。中国語や韓国語は就職に有利となる場合もあるが、中高生がこうした言語をキャリアと結びつけて考えることは難しいのかもしれない。しかし、学生たちが発する「なんとなく」「ちょっと興味が」などの表現には、不明瞭なキャリア意識が隠れている可能性を感じさせる。この時期、学生の留学意欲は漠然としたものであったが、アジア言語の修得とキャリアのつながりを明らかにする何らかの刺激材料が提供されれば、より早い段階で留学に向けた準備が始められることだろう。

一方、学生の留学意欲の芽生えに強い影響を与えていたのは、年々増える東アジアからの観光客とアジアが好きな母親や友人である。つまり、学生たちのまわりには東アジアへの関心を生成する環境があったということだろう。「地元が観光地なんで、韓国人や中国人がすごく多くて・・・何しゃべってんだらうって(気になっていた)」、「母が、台湾いいんじゃないって。旅行にも何回も行きました」などの語りが示すように、街で見かける中国

時間の流れ

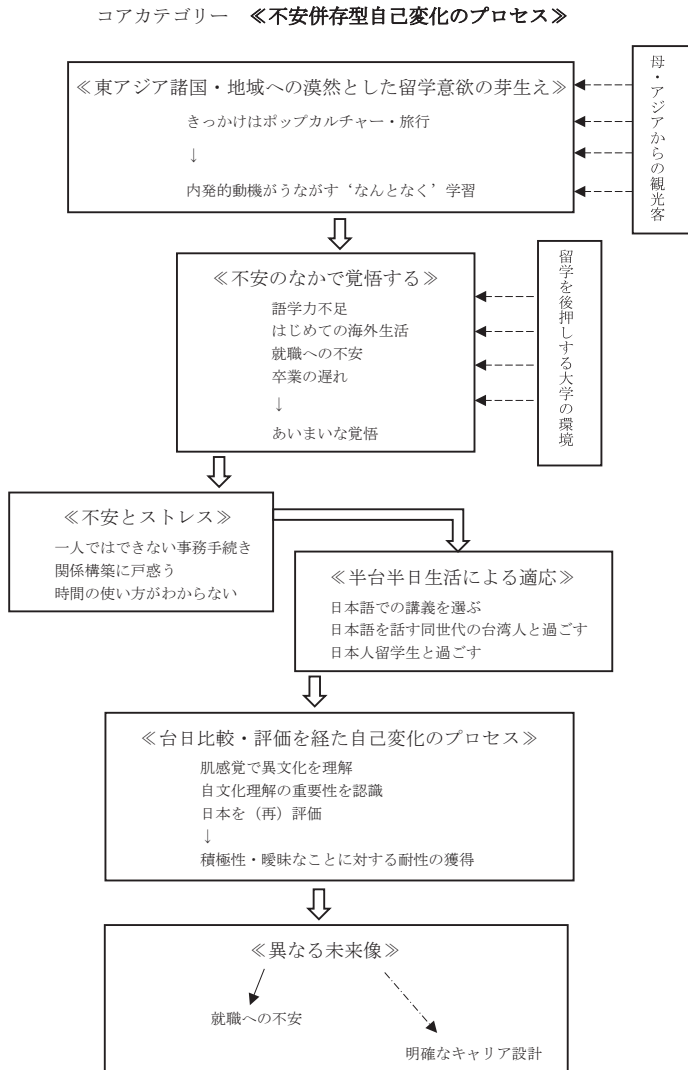


図3 輔仁大学日本語文学系への1年留学による変化のプロセス

や台湾あるいは韓国からの観光客の行為や言語に興味を持ち、また、女子学生ということもあってか、母親の影響を強く受けている学生が目立つ。母親とともに何度も台湾旅行に出かけたり、母親の助言を受けて中国語を学び始めるなど、留学動機の根底には、母親の中国・台湾に対する態度や考え方が存在していた。

こうして東アジアへの関心は途絶えることなく続き、中学・高校時代を通じて学生たちは、台湾や韓国、中国からの多種多様な映像をネット等で楽しんでおり、なかには語学学習を本格化させる者もあった。ある学生は独学でハングルの読み書きができるようになり、別の学生は‘中国語母語話者と話せるレベル’ とされる HSK 4 級を取得していた。さらに、高校時代に本学のオープンキャンパスに参加した学生もいたが、その理由を尋ねると、台湾をフィールドとする研究者の模擬講義を受講するためであった。

2. 不安のなかで覚悟する

大学入学後は、いずれの学生も中国語を履修しており、なかには中国語と英語の学習を同時進行させていた学生もいた。また、「中学の時は K-POP も好きだったんですが、中国語を話す人はすごく多いし、やるなら中国語かなって」といった語りが象徴するように、この時点においては、中国語あるいは台湾や中国への留学に対する関心が韓国語や韓国留学を上回っていたことがわかる。

本学では、留学申込にあたり中国語の担当教員の推薦が必要で、それなりの評価を得たものが派遣審査の対象となる。入学前に HSK 4 級を取得したという前述の学生は、大学の中国語教師（非常勤）に勧められ、札幌市内にある孔子学院⁹のサテライトキャンパスで語学学習を始めたといい、渡航直前までには 5 級¹⁰を取得していたが、こうした学生はむしろ少数派

9 海外の大学等と連携し、中国語の教育や中国文化の喧伝をする中国政府の機関。
10 中国語の新聞・雑誌を読んだり、中国語のテレビや映画を鑑賞することができ、中国語を用いて比較的整ったスピーチを行うことができるレベル（HSK公式サイトより。検索日は2018.10.30）。

である。渡航直前の学生は、多くがHSK 3級あるいはそれ以下の中国語能力しか持ち合わせておらず、応募者の中国語運用能力は乏しい。こうした語学力不足にくわえ、はじめての海外生活、就職への不安、教職課程に在籍しているような場合には卒業の遅れなど、考えなくてはならない多くの材料を目の前に、学生たちは不安を覚えながら留学を決意していた。すべての不安要素は、英語圏に留学する学生たちと同様だが、語学の学習時間を考えると台湾派遣の学生が抱える語学力不足に対する不安は、計り知れないほど大きい。これは大学が対応すべき中心的課題の一つであろう。

一方、こうしたさまざまな不安に寄り添って、学生たちに留学を決意させるのも大学である。学生たちは、中国語の教師や国際交流室の職員、台湾留学経験者をはじめとする学内関係者に相談し、留学に向けた直接間接の準備をしている。これを留学を後押す大学の環境と概念化した。ただし、こうした学内環境が留学への確固たる自信にはつながっておらず、これをあいまいな覚悟と概念化した。たとえば、ある学生は「行く前は、単語と文法を少し勉強しただけ。・・・でも、(教師や職員、留学経験者の先輩から色々話を聞いて)考えすぎると何もできなくなっちゃうので、とりあえず、行っちゃいました」と語っていた。

3. 不安とストレス

渡航直後の学生たちは、暮らしが落ち着くまでの間に対応すべき種々の課題に直面し、それらが不安を増幅してストレスを感じさせていた。およそ一人でではできない事務手続きにショックを覚えたり、寮のルームメイトや掃除係など身近な人々との関係構築に戸惑い(う)、空いた時間の使い方がわからないなど、「不安の種はつきなかつた」と語る。

寮費の支払いや入寮の手続きなど、必要なところでは日本語の話せるバディがつきそうだが、それでも「毎日、毎日とても不安でした。買い物もご飯やさんでも、何いってるかまったくわからなかった」、「ルームメイトがイタリア人だったんですが、(私は)英語も中国語もしゃべれなくて、(つきあい方が)ほんとに難しかった」などと語る。なかには、不適応をおこ

していた同室の日本人留学生との共同生活にストレスを覚えて、1か月間じん麻疹に悩まされたり、レベルのあわない語学の授業についてゆげず悩んだという学生もいたが、不安の主たる理由は中国語の力である。幸いにもバディをはじめとする所属学科の日本語話者や、中国語が流ちょうな他大学からの日本人留学生と知り合うことで、初期段階の不安とストレスは、およそ2週間から1か月程度の間で解消されるようであった。

4. 半台半日生活による適応

繰り返し述べてきたように、派遣留学生は日本語文学系という学科に所属し、少なくとも日本語での講義を選び（選ぶ）、授業内外で日本語を話す同世代の台湾人と過ごす時間が多い。また、寮のなかや週末などは日本人留学生と過ごす時間も多く、当然ながら日本人とは日本語を使って会話している。台湾文化・生活への適応プロセスには、現地に存在する十分すぎるほどの日本語環境が影響を与えている。

派遣留学生の台湾生活は、英語圏から日本にやってくる多くの英語母語話者と同じタイプのものである。英語の native speaker は、英語を話す（あるいは英語を話したい）多くの日本人に囲まれ、native speaker の仲間も少なくない。一方、こうした生活環境は異文化適応を容易にするという点では有利だが、語学力という点ではむしろ不利にはたらく可能性も高い。《半台半日生活による適応》のプロセスにおける中国語初学者のスムーズな異文化適応と語学力向上を同時に推し進めるのは、悩ましい問題である。台湾への長期派遣については、少なくとも派遣者である大学と被派遣者である学生が、個々人の語学能力に応じた明確な留学目標を設定し、‘協働’することが重要といえる。

5. 台日比較と評価を経た自己変化のプロセス

台湾での生活も2か月を過ぎたころから、学生には徐々に精神的な余裕が出てくる。言語的には自立に程遠いものの、「(日本人の友だちと) 週末は買い物や観光地なんかには必ず出かけて」いたり、「イタリア人のルームメイトに誘われてピザの美味しいお店に行った」りするようになっていた。

そうしたなかで、学生たちは肌感覚で異文化を理解するようになっていく。「あの人たちは何をしてもハッピー。・・・みんなで、家族で楽しそうに生きてる」、「あっちの人、みんな、おおらかで、時間もだいたい10分遅れ」、「授業中に朝ごはん食べてるの見て、びっくり」などと語る。学生たちは台湾の異なる時間感覚、家族観、接客方法、講義の受講態度などに戸惑いつつも、概して楽しみながら違いを受け入れていた。半年も経つと、「日本では許されないことを台湾人はする。でも、のびのびした感じが自分にはいいな」と思うようになっていたり、「丸くなったっていわれる。遅刻しても、多少汚くても大丈夫になったからかもしれない」などと語り、自分自身の変化にも肯定的になっていくようであった。

今回はデータの数が少なく、国際適応力テスト（簡易版）¹¹の結果にグループとして一貫性のある特徴を見出すことはできないが、4つの指標のうち「曖昧なことに対する忍耐度」については、4人のうち1人が中レベルから高レベルへと段階を上げ、残る3人のうち2人にもスコアの上昇が見られた（図4参照）。規則や慣習に縛られない台湾人のおおらかな生活態度は、コミュニケーションにおける「期待はずれ」の現象に対する学生の許容度を高めた可能性がある。同時に、「困ったことがあったら、（躊躇せずに）聞く」、「最初からダメって決めつけない」、「やってみなきゃわからない」といった語りはすべての学生から聞かれた。台湾での留学経験は、コミュニケーションにおける学生の積極性・曖昧なことに対する耐性の獲得につながったといえるだろう。

一方、「日本、特に北海道についてもっと勉強しておくべきだった」などの語りが見えるように、適応が進むと自文化理解の重要性も認識しはじめる。また、「街にいくと日本人はすぐわかる。態度や雰囲気が違う。礼儀正しい。（だから）日本人っていうだけで、他の国の人たちからの食いつ

11 D. マツモト（1999）『日本人の国際適応力—新世紀を生き抜く四つの指針』に記載された簡易版テストを使用した。

	自尊心・自己受容度		曖昧なことに対する 忍耐力		批判的な考え方と 創造性		開放性と柔軟性	
	留学前	帰国後	留学前	帰国後	留学前	帰国後	留学前	帰国後
学生 A	中: 6	高: 2 (↑)	中: 1	高: -6 (↑)	中: 6	低: -9 (↓)	中: 10	中: 7 (↓)
学生 B	中: 11	中: 18 (↓)	中: -1	中: -1 (→)	中: 11	中: 3 (→)	中: 12	高: 15 (↑)
学生 C	中: 7	中: 4 (→)	中: 5	中: 1 (→)	低: -2	低: 1 (→)	中: 8	低: 7 (↓)
学生 D	中: 10	中: 4 (→)	中: 4	中: 1 (→)	中: 8	中: 9 (→)	低: 7	中: 10 (↑)

表 1 2017年度 輔仁大学への長期派遣学生の国際適応力テスト留学前後のスコア比較

- ・自尊心・自己受容度 (高: 3.14以下、中: 3.14 ~ 13.51、低: 13.51以上)
- ・曖昧なことに対する忍耐力 (高: -1.89以下、中: -1.89 ~ 5.66、低: 5.66以上)
- ・批判的な考え方と創造性 (高: 12.51以上、中: 2.91 ~ 12.51、低: 2.91以下)
- ・開放性と柔軟性 (高: 14.42以上、中: 7.98 ~ 14.42、低: 7.98以下)

* 帰国後の各スコアの後に記した3種の矢印 (↑、↓、→) は、3レベルに分けられた能力の移動を意味する。

* 表中の網かけは、「より良い方向」へとレベルが上昇した場合、また、同じレベル内であっても3ポイント以上上昇した場合を示す。逆に3ポイント以上下げた場合は波線を引いて示した。

きが結構大きい。誇りに思いました」、「(日本人のように) きちんとして
いることは、たぶん、信頼される」などと語る学生もおり、台湾の暮らし
を通して学ぶ現地文化の理解は、日本の(再)評価とコインの裏表のよう
な関係にある。

6. 異なる未来像

帰国後の学生たちを待ち受けるのは、就職活動 (あるいはそれに向けた
準備) である。なかには SPI (総合適性検査) 対策のために問題集を携え
て台湾に行った者もいたが、派遣学生たちの就職活動をめぐる不安は、一
般の学生たちとはやや異なっている。「(やってきたことが) 就職につながる
の? っていわれたら、ん〜、あまり定かでないというか。この程度 (の
語学力) で何の役に立つの? かっていわれたら、なんかどうしようもない」、
「(就職は) 経験が生かせればいいと思うけど、今のところあまり考えられ

ない]などと語る。理由の中心にあるのは、期待していたほど伸びなかった中国語の能力である。帰国後の自分自身の中国語力について学生たちは、テレビ視聴でおよそすべてがわかるのは天気予報程度で、ドラマやニュース、バラエティは字幕つきで6割程度しかわからないと語る。要するに、‘1年間の台湾留学’が周囲に与えるイメージと実際の語学力のギャップが、就職への不安を抱かせているのである。

また、語学力に不安を抱える3人の学生がいずれも「もう一度(台湾)行くなら、たぶん、旅行程度」などとしたことは興味深い。北海道とは全く異なる台湾の気候や日本と比べて未整備なインフラなどが理由としてあげられたが、本学からカナダ、イギリス、オーストラリアなど英語圏へ派遣された多くの学生が、留学先に‘戻りたい’(また暮らしたい)といった意思表示をするのと対照的である。

一方、留学前に独学で中国語を勉強していた学生は、そもそも留学の初期段階から日常会話には苦勞しなかったと語り、将来は台湾の大学院で翻訳学を学びたいと明言する。まずは地元にある国立大学での修士号取得をめざして、現在は受験勉強にまい進しているとのことで、これを明確なキャリア設計と概念化した。異なる未来像を持つ2つのグループへと学生を分けたものは、留学前の語学力であろう。台湾におけるおよそすべての学修は、この力を出発点に進められ、留学の質を左右したと考えられる。

V. おわりに

本論では、中国語初学者の台湾留学における変化のプロセスには、「不安」が併存していたことを明らかにした。また、このプロセスは、漠然と留学に興味を持ち始める中学・高校の時期、大学入学後から留学を決定するまでの時期、留学中、そして帰国直前から帰国後といった4つのタイムブロックから構成されていた。最終的に学生は、日台双方の文化理解を深め、コミュニケーションにおける積極性や曖昧なことに対する耐性を獲得していたが、いずれのタイムブロックにも「不安」は存在していた。これは本

学が提供する英語圏への長期留学プログラムの経験者には見られない傾向であり、注目に値する。

不安の背景には渡航前の語学力が関連している可能性があった。中国語初学者を対象とした長期の学部留学は、本学のように派遣先が日本語関連の学科でないとは実現は難しいが、それが必ずしも学生にとって利益的であるともいい難い。世界政治や経済における中国の台頭を背景に、中国語が学べる台湾への留学は、ますますその重要性を増すことだろう。留学に耐えうる十分な語学訓練を派遣前に提供することの可能性、語学訓練に特化した半年（セメスター）の留学プログラムへのシフトなど、中国語の初学者を対象とした日本語文学系への長期派遣は、今、まさに再考が求められているといえる。

一方、グラウンド・セオリーの特質上、本研究は中国語の初学者が、留学先の学内外で十分に母語を利用することが可能な環境で留学した場合の大学生に対してのみ説得力を持つ。また、本学の台湾派遣事業の成果を包括的に探るための課題として、卒業生への調査も必要であろう。台湾への留学経験は卒業後のキャリアにどのような形で生かされているのか（いないのか）を探ることは、プログラムの質の向上や再構築を考えるにあたり、極めて重要である。

<謝辞>

本論文の執筆にあたり、藤女子大学国際交流室の品田実花主任、猿橋文章室員、柳本睦子教務課長には、本学の台湾派遣にかかわる各種データを提供していただいた。深く感謝申し上げます。

引用文献

王 毓(2012). 台湾における外国人留学生への中国語教育の現状 (1) 福岡大学 人文論叢44(1), 85-104.

大西好宣(2007). 欧米でなく、アジアへ留学することの意義——留学

前後の問題とキャリアパス：企業の視点を中心に—— 2005年度
JAFSA 調査・研究助成事業報告書.

木下康仁(1999). グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的研究方法の再生 弘文堂.

木下康仁(2007). 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法 富山大学看護学会誌, 6(2),1-10.

工藤和宏(2003b). 友人ネットワークの機能モデル再考——在豪日本人留学生の事例研究から—— 異文化間教育, 18, 95-108.

呉 書雅(2012). 戦後の台湾留学生派遣政策の変容 広島大学高等教育研究開発センター 大学論集, 43, 369-379.

朱 静雯(2016). オーストラリアの大学におけるアジア人留学生支援に関する研究——文化理解・相互理解の促進を中心に—— 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 16, 65-8.

杉村美紀(2006). アジアにおける留学生政策と留学生移動 アジア研究, 54(4), 10-25.

高橋朋子・服部圭子・武知薫子・酒匂康裕(2018). 長期交換留学における大学生の学び——韓国の大学単位取得型のカリキュラム—— 異文化間教育, 48, 86-100.

Gareis, E. (2012). Intercultural friendship: Effects of home and host region. *Journal of International and Intercultural Communication*, 5(4), 309-328.

引用 URL

台湾外交部(台北駐日経済文化代表処). 中華民国政府、日本の北海道地震で特殊救助隊派遣の用意

https://www.roc-taiwan.org/jp_ja/cat/40.html 閲覧日2018.09.23

台湾教育部. 2016年、台湾に留学した日本人総数は、7,548人

https://www.roc-taiwan.org/jpyok_ja/post/1841.html

閲覧日2018.10.04

北海道経済部観光局. 訪日外国人来道者（実人数）の推移 平成9年度
～平成29年度

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

閲覧日2018.10.07